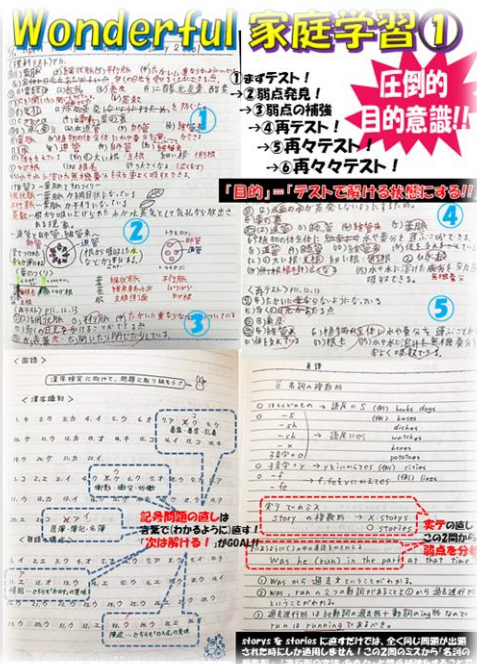
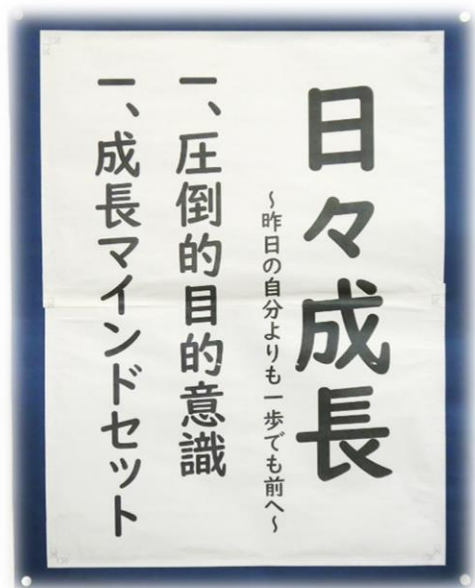


第 71 次印旛教育研究会

(進路指導)

社会を切り拓き力強く生きていくためのキャリア教育

～全ての教育活動を通じた基礎的・汎用的能力の育成～



四街道市立四街道北中学校
布施 智之

1. 研究主題

社会を切り拓き力強く生きていくためのキャリア教育
～全ての教育活動を通じた基礎的・汎用的能力の育成～

2. 主題設定の理由

(1) 学習指導要領（一部抜粋）（資料編P1参照）

本研究は、中学校学習指導要領第1章総則【第4 生徒の発達の支援】に基づき設定した。

従来の「進路指導」に代わり、「キャリア教育」が初めて登場したのは、H11の中教審においてである。その後、教育基本法、学校教育法において、キャリア教育に関連する項が定められ、H23には『中学校キャリア教育の手引き』が刊行された。それらの流れを踏まえ、新学習指導要領にも資料のように定められた。

新学習指導要領のメインコンセプトの一つは、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換、つまり、知識（何を知っているか）から資質・能力（何ができるか）への転換であると考えられる。よって、学校の全教育活動に、キャリア教育の視点をベースとしておき、社会の中で力強く生きていく資質・能力を育てることがますます重要となっていくと考える。また、「生きる力」の育成という視点からも、社会人として自立した人を育てるためのキャリア教育の重要性が言及されている。

(2) 『中学校キャリア教育の手引き』（一部抜粋）（資料編P1参照）

ア キャリア教育

「社会的・職業的自立」とは、グローバル化、情報化（Society5.0対応も）、多様化等が進み、変化のスピードも速く、様々な課題が考えられる現代社会において、自他を見つめ、自身の内外にある様々な課題を見出し、主体的に考え、粘り強く解決していくことであると捉える。そのような社会で「基盤となる能力や態度」とは、変化を恐れず、変化に対応していく力、課題を発見、解決し、社会を形成していく力であると考えられる。

また、「生涯の中で様々な役割」に関連し、中学生は前述の様々な能力を身に付けるための基礎を学習する時期であると考えられる。社会人として未来を切り開くため、中学生段階から、「自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出す」ために、自分自身をメタ認知し、社会を生き抜く基礎的な力をつけ、自らの生き方を選択していく必要がある。

イ 基礎的・汎用的能力

変化の激しい社会を生き抜く人材を育てるのは社会全体の責務であり、学校教育が経済界や産業界と連携し、そこにつながる指導をすることが大切である。社会を生き抜く人材として求められる力は、各界から様々な提起されてきた。（以下例）（資料編P1～3参照）

内閣府「人間力」 経産省「社会人基礎力」 厚労省「就職基礎能力」
文科省「①人間関係形成能力」「②情報活用能力」「③将来設計能力」「④意思決定能力」

文科省では、それらを踏まえ改めて分析を加え、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力」として再構成し、そのために必要な力を新

たに、「基礎的・汎用的能力」(①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力)として設定した。

以下は、本研究で考える、それらの力の関連性、系統性を示した図である。

基・汎能力	① 人間関係形成・社会形成能力	② 自己理解・自己管理能力	③ 課題対応能力	④ キャリアプランニング教育
文科省「4領域8能力」	・コミュニケーション	・コミュニケーション ・自他の理解	・計画実行 ・課題解決	・情報収集探索 ・職業理解 ・役割把握・認識 ・計画実行 ・選択 ・課題解決
内閣府「人間力」	・コミュニケーションスキル ・リーダーシップ ・公共心 ・相互啓発心	・規範意識 ・意欲 ・忍耐力 ・自己受容・自己実現	・基礎学力 ・論理的思考 ・創造力	・専門的な知識ノウハウ
経産省「社会人基礎力」	・発信力 ・傾聴力 ・柔軟性 ・規律性 ・状況把握 ・働きかけ	・規律性 ・ストレスコントロール ・状況把握	・課題発見 ・計画力 ・創造力 ・状況把握 ・主体性 ・実行力	
厚労省「就職基礎能力」	・意思疎通 ・協調性 ・自己表現 ・社会人常識 ・基本的なマナー	・自己表現 ・向上心・探求心	・責任感 ・読み書き ・計算・数学的思考	・職業意識・勤労観 ・社会人常識

本研究では、様々な教育活動を「基礎的・汎用的能力」と関連付け定義付けをし、行った実践について考察する。学年として、育てたい生徒像を明確化し、学年目標をシンプルに「日々成長～昨日の自分より一歩でも前へ～」とした。そこに向かうための2本の柱は、「圧倒的**目的意識**」「成長**マインドセット**」と設定した。この「成長マインドセット」を、生徒に身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」と定義した。これらの「成長マインドセット」を自分のものとし、世の中の様々な課題(具体)に**適応**させていくことで、子どもたちが社会を切り拓き力強く生きていくことができるようになる**と考える**。

(3) 印教研主題から

自らの進路を切り拓くキャリア教育の推進

本研究は、印教研進路指導研究部の主題を受けて設定している。「自らの進路を切り拓く」

ためには、個に応じた一人一人の成長が必要である。「キャリア教育」は、前述したように、従来の「進路指導」が陥りがちであった所謂「出口教育」ではなく、全人格的な発達を求め、一生使える力を育てるために、社会的・職業的自立に必要な基盤となる能力や態度を付けさせることと考える。つまり、社会の中で生きていくために不可欠な能力（基礎的・汎用的能力、本実践では「成長マインドセット」）を育てることを目的として考えている。

学年目標「日々成長」を達成することを最上位目的とし、そのためには、「基礎的・汎用的能力」を手に入れることが重要と考える。よって、「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせることにより、印教研の主題が達成できると考える。

（４）生徒（学年）の実態 平成31年度入学生徒177名（資料編P3参照）

学年職員は9。学年主任1名、通常学級担任5名、特別支援学級担任1名、副担任2名と言う構成。年度ごとの入れ替わりはあるが、若手からベテランまで、毎年、どの先生方も、改革・チャレンジ精神を持っており、新しい取組を行うことを厭わない。また、学年目標にも深い理解を示し、学年主任のもと、学年職員一丸となって様々なことを協力して進めていける状態であった。

先生方は、生徒に必要以上に指示を出し過ぎず、頭ごなしに指導することもなく、「生徒に考えさせ、信じて任せる」ことをベースにおいた指導をしている。そのため、学年の生徒は、教員が語る言葉をよく聞き、教わったこともまずはやってみようと言う素直な気持ちを持ち、先生方への信頼も厚いと感じる。ただし、言われたことを言われた通り行うだけの姿は、我々の目指す生徒像ではない。一つ一つの行動に自ら価値を見出し、自ら判断して行う、つまり、全ての行動において「目的意識」をもって行動する生徒を育てたいと考えている。

学年目標「日々成長」、そして達成するための柱である「①圧倒的目的意識」、「②成長マインドセット」は2学年、3学年と連続して設定した。そして、あらゆる場面において目標を意識し、それにより「基礎的・汎用的能力」を高めよう指導を続けてきた。

3. 研究仮説

【仮説①】

基礎的・汎用的能力を「成長マインドセット」と定義し、継続して学年としての指導を続ければ、非認知能力が高まり、力強く生きていくための手助けとなるだろう。

【仮説②】

基礎的・汎用的能力を高めれば、それらを様々な具体に応用して、学力等の認知能力の向上にもつながるだろう。

4. 研究内容(具体的手立て)

【仮説①手立て①】 学年指導をベースとした成長マインドセット（資料編P4～6参照）

学年集会では、学年主任からの話の中で「成長マインドセット（基礎的・汎用的能力）」に関わる指導を必ず行っている。また、集会で指導したマインドセットについては、学年だよりも掲載し、生徒の振り返りや保護者へのお知らせも併せて行っている。

学年職員は、自身の解釈を更に加えたりしながら、日々の生活や授業、部活動、と様々な教育活動と関連付け、学年として日々指導を行っている。様々な成長マインドセットが浸透し、共通言語化することにより、更に効果が上がっていくと感じている。

<基礎的・汎用的能力と成長マインドセットの関り>

基・汎能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力
成長マインドセット	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめについて ・悪意の郵便屋さん&放火魔 ・「友達」考察 ・こんな〇〇は〇〇だ ・心マトリクス 	<ul style="list-style-type: none"> ・成長マインドセット ・ピンチはチャンス ・殻を破ろう ・環境について ・やる気の出し方 ・こんな〇〇は〇〇だ ・成功？失敗？ ・ズルいをこえろ ・レベルの高い集団へ ・心マトリクス 	<ul style="list-style-type: none"> ・圧倒的目的意識 ・けテぶれ ・「分ける」と「分かる」 ・「分かる」から「できる」へ ・解像度を上げろ
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・効率と公正 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット利用の基本コンセプト ・SC 講話「ストレスマネジメント」 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒マスク ・効率と公正

<集会指導用のパワポスライドや学年だより例>

「ピンチはチャンス」を例とした「成長マインドセット」のパワポスライドの一例。

指導内容を学年だよりで紹介。生徒の振り返りと同時に保護者にも啓発。

【仮説① 手立て②】 各教科での指導

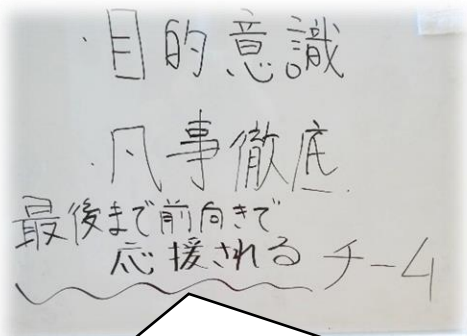
例えば、社会科の公民分野では、「現代社会の見方・考え方」の単元を設定した。「効率と公正」という現代社会の見方・考え方を2軸4象限マトリクスで表し、自分達が普段から意識せずに行っているであろう様々な判断基準の可視化を行い、意識的に判断できるような学習を行った。



「効率と公正」の2軸4象限マトリクス。以前、テストの振り替えりにおいてドラゴン桜2でも「受験マトリクス」として紹介された「主観⇔客観マトリクスノート」(片山湧人『東大生のノートから学ぶ 天才の思考回路をコピーする方法』より)を利用して行っていることもあり、「2軸4象限マトリクス」自体を便利なマインドセットとしてとらえている生徒も。

	できた	できなかった	
得意	2次関数	平面図形 場合の数	こんなイメージだ
		高次方程式 三角関数	
苦手	論証・証明	確率	
	命題と証明	データの分析	
		論理と集合	

『ドラゴン桜2』より「受験マトリクス」



【仮説① 手立て③】 学級活動や部活動での指導

学級活動や部活動では、各先生方から多くの成長マインドセットが注入されていると考える。また、学年指導による成長マインドセットを共通して使うことによって、成長マインドセット自体も洗練されていくと考える。

女バスのチームコンセプト。他の部活でも「目的意識」に重きを置いて指導をする先生は多い。

【仮説② 手立て①】

「けてぶれ(小サイクル)」を意識した自律した学習者への転換 ~自学ノート~

ア 「けてぶれ学習法」を学習の中心となる成長マインドセットとして指導した。ちょうどコロナによる休校中の4月であったため、まず、学年だよりにより、学年全体への指導を行った。登校再開後は、学年集会(リモート)により、再度「けてぶれ」を学年全体へ説明。その後、日々の自学ノートの取り組みの中で、学級担任の指導を中心に生徒は「けてぶれ」を行っている。この1単位時間の自学についての「けてぶれ」を「小サイクル」と位置付けた。

<けてぶれとは?>

「けてぶれ」とは、兵庫県の小学校教員である葛原翔太先生が提唱する「子ども自身が主体的に行う効率的な学習方法」である。

け (計画)目標に向けて学習計画を立て、
て (テスト)自身の実力を自分で測り、
ぶ (分析)実力を上げるためにはどうすればいいかを考え、
れ (練習)学習を積み重ねる

右『「けてぶれ」宿題革命!』より



という、大人が当たり前に行っている「PDCAサイクル」を、学習を通して子ども

にマインドセットとして植え付け、大きな効果があると考えられている。実際に、葛原先生の著書『「けてぶれ」宿題革命!』は、教育書としては異例の売り上げとなり、休校期間中にはTVでも取り上げられ話題となり、SNS上では、「けてぶれ」を実践している先生方の「子どもが伸びた!」と言う報告が多く上がっている。

イ 「分かつと分かる」と言うマインドセットを指導し、「分かる」ことの解像度を上げられるようにした。そして、「分かる」で満足せずに「できる」ようにするための手段としての「けてぶれ」と位置付けた。スポーツ等ではこの流れはイメージし易く当たり前であるが、勉強においては、「分かる」で満足してしまっている生徒も多いように感じる。

「分かる」とは? I 「分ける」と「分かる」

動かす器官で「分ける」
足 左手 右手

拍で「分ける」 **8拍**

	1	2	3	4	5	6	7	8
右手	○	○		○	○	○	○	○
左手			○				○	
足	○				○	○		

ドラムの基本リズム「8ビート」。一見難しそうであるが、動かす3つの要素「右手」「左手」「右足」と、8拍に「分ける」ことにより、理解し、叩けるように。

「分かる」とは? II 「分かる」から「できる」へ
スイングを上達させたい! 「できる」には?

「分」析です。スイングを「分ける」と「分かる」
「ぶ」…自分のスイングを分析

テイクバックで肩が入りすぎていることが**分**かった!

OK! 分かったから今日の練習は**終**わり!

勉強も同じ!

練習せんのかい!?

自分の姿を撮影して見るのもアリ。

なのに… けっこう、多くない?

ビデオで撮ってみて見たらテイクバックで肩が入りすぎていることが**分**かった!

ワーク早めに終わらせて丸付けもOK! 分析で自分ができてないところが**分**かった!

OK! 分かったから今日の練習は**終**わり!

OK! いっぱい勉強したぜ! できてないところも分かったし、今日の勉強は**終**わり!

練習せんのかい!?

勉強と部活動。この2つを結び付けることにより、勉強における「分かる」で終わっている生徒の意識を「できる」まで向けたい。

ウ けてぶれ交流会や良い例を学級通信等により紹介することで、「けてぶれ」のイメージがなかなか掴めない生徒への支援とした。(資料編P6参照)

Wonderful 家庭学習①

圧倒的**目的意識!**

① 再テスト!
② 弱点発見!
③ 再テスト!
④ 再々テスト!

「目的」=「学習で得たい知識・技能」

① 目的設定
② 学習計画
③ 学習実施
④ 振り返り

授業の振り返り
① 授業の振り返り
② 授業の振り返り
③ 授業の振り返り

ある学級の通信。学年目標の柱でもある「圧倒的**目的意識**」と「けてぶれ」の相性は抜群。



交流会。感染予防の観点でほとんどできなかったが、効果は大きいと考える。

【仮説② 手立て②】 (資料編P7~9参照)

「けてぶれ (大サイクル)」を意識した自律した学習者への転換 ~各種テスト~

定期テスト、実力テスト等を利用して、1週間~数週間、数か月のある程度の長いスパンによる「けてぶれ」を「大サイクル」と位置付け指導した。学習の計画(定期テスト)、テスト後の自己採点(実力テスト)、分析(定期テスト、実力テスト)等を行い、得点で一喜一憂するのではなく、その先、自分の成長につなげられる振り返り(分析、練習)をすることをやっている。また、各教科においてもテスト返却時、それぞれの教科担任によって同じように指導を行っている。

1. この結果に基づいた課題(分析)		2. 意を受けての気づき、自分の実力、継続点	
観点	結果	気づき	継続点
基礎的・汎用的能力	基礎的・汎用的能力が低い傾向がある。	基礎的・汎用的能力を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。	基礎的・汎用的能力を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。
成長マインドセット	成長マインドセットが低い傾向がある。	成長マインドセットを高めるための学習方法や内容を考える必要がある。	成長マインドセットを高めるための学習方法や内容を考える必要がある。
振り返り	振り返りができていない傾向がある。	振り返りができるように学習方法や内容を考える必要がある。	振り返りができるように学習方法や内容を考える必要がある。
部活	部活の成績が低い傾向がある。	部活の成績を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。	部活の成績を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。
テスト	テストの点数が低い傾向がある。	テストの点数を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。	テストの点数を高めるための学習方法や内容を考える必要がある。

分析の観点を「気持ち」「勉強方法、内容」「時間」の3つに分けて分析。初回は、先生方が考えた、多くの例を紹介。
生徒の振り返りに対して、学級担任からの価値付けも行い、保護者へのテスト結果のお知らせ時には、分析シートも一緒に見られている。

5. 仮説の検証

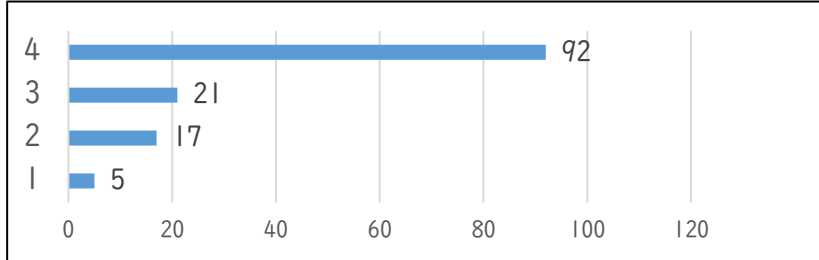
【仮説①】

基礎的・汎用的能力を「成長マインドセット」と定義し、継続して学年としての指導を続けられれば、非認知能力が高まり、力強く生きていくための手助けとなるだろう。

ア 生徒アンケートから (R3.7.16 136名) (資料編P10参照)

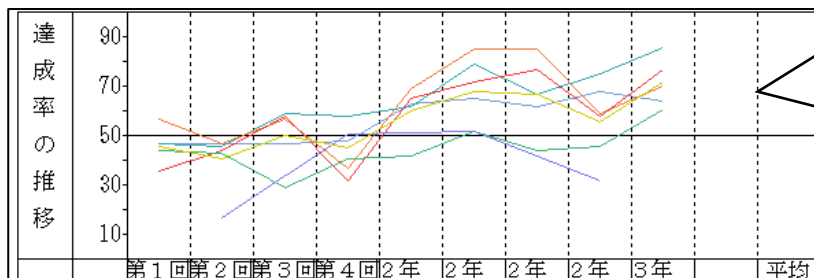
様々な「成長マインドセット」が「基礎的・汎用的能力」の育成に役立っていますかと4段階で質問をした。その結果、多くの項目で平均3以上の数値が見られた。特に数値が高かったものに関して、以下に、いくつか紹介する。

けてぶれ
3. 4 6



★★★★

- ・特にテストでは振り返るといって単純な作業でもやるかやらないかでは大きな違いがあることがわかりました。
- ・特にテストが終わった時にけてぶれをすると自分の得意な所、苦手なところが手に取るように分かるから。
- ・けてぶれのおかげで、部活の成績・テストの点数、どちらもあがったから。
- ・部活でうまくいかないとき、どうしたらいいか自分で考えられる。
- ・次に自分が何をしたらよいか、自分に何が足りないのかがわかるし効果的な学習ができるから。 etc...



「けテぶれで成績が上がった」と答え、実際にテストの点数に表れていると考えられる生徒の定期テスト点数の推移例（1年①～3年①）

★★

・例えばわたしはけテぶれのほうが向いてるのですが私みたいにけテブレをベースに自分の勉強法を見つけられそう

★

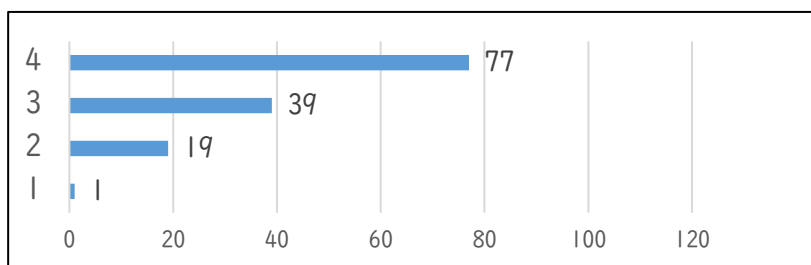
・正直けテぶれをやるのがめんどくさくなってしまふ。 etc…

評価が低かった生徒達。

「けテぶれ」は、他の成長マインドセットに比べて「4」を選んだ生徒が圧倒的に多いが、逆に「1」を選んだ生徒も多く（そこまで極端ではないが）、効果を実感した生徒には大きな成果をもたらすが、苦手な生徒にとっては理解や活用が難しい部分もあるのかもしれない。

圧倒的
目的意識

3. 4 1



★★★★

- ・意識するようになってから、部活動でも勉強でも、目的からそれていることをしないように心がけるようになった
- ・手段が目的化してしまっているときに自分で気づけるようになってきました。
- ・テストは「目的」ではなく、あくまで学力を伸ばすための「手段」であり目的への「過程」であると感じられたから。
- ・目的を達成するために工夫する力が養えると思った。
- ・目的意識がないまま行動しても、ほとんど意味がないからで、目的意識をもって部活や勉強などに取り組めば「どこがいけなかったのか」「何が悪かったのか」など、より詳しく、より早く導き出せるから。
- ・部活動などで目標を達成した後も、何が良かったのかを考えることが多くなった。
- ・今までできていた習慣などが面倒になってやめようとしたときに、どんな目標をもって始めたのかを思い出すと目標を立てた時の心境に戻り、習慣を続けている意味を思い出し、具体的に物事を見ることができるようになるから。 etc…

学年目標を達成するための柱の一つでもあり、全てのベースとなる成長マインドセットで、学年職員も常に言い続けてきた「圧倒的
目的意識」は生徒の間はかなり浸透している実感もある。普段の生活をしている中でも、「この目的は何ですか?」とか、「それ、手段の目的化じゃん?」と言うような会話がふとした時に聞こえる生徒になっている。

イ 教員アンケートから

- ・教員が指示をしたことに対して、何も考えず言われたままやるのではなく、「それをやる目的って何ですか？」と問われることが多くあった。また、生徒総会資料を見ながら「これただの手段じゃん」と独り言を呟く生徒もあり、手段の目的化に対する意識？も垣間見えた。
- ・一人の生徒に対して色々な教員が声をかけたり関わったりしたことが、教員にとっても、子どもたちにとっても、考えが広がり深まることにつながっているなど感じます。
- ・特に部活動の場面では、練習の目的を伝えるよう意識している。その結果、練習で意識すべきポイントが伝わりやすくなり、部長からの呼び掛け等もしやすくなった。

ウ 社会科の課題への取り組みから

中学校では、定期テスト時に課題（ワーク）を行い、提出するということが良く行われている。本校でも、5教科を中心に多くの教科で行われていた。しかし、「課題を行うことが勉強」と考えたり、「課題が終わらないからテキストに終わらせて（ひどい場合には答えを写すだけの場合も）取り合えず提出」と言うような「課題の作業化」が少なからず見られる状態であった。そこで、「課題の作業化」から「意味があるからワークを解き、意味があるから繰り返す」への三段階で転換を図った。

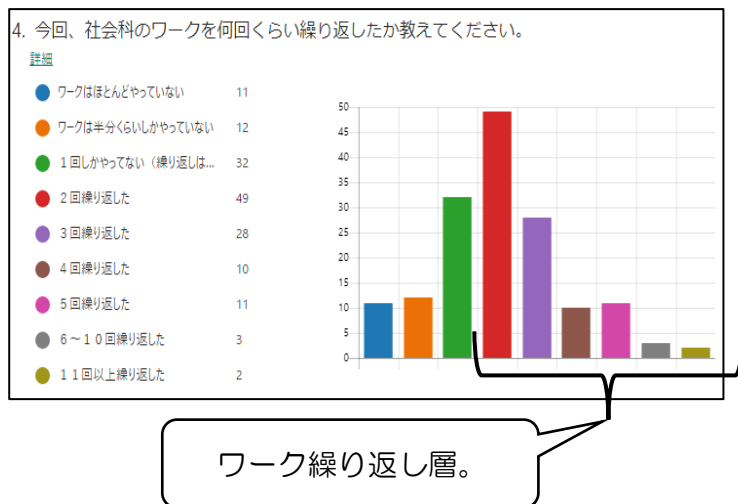
第一段階 提出は義務（繰り返しは評価）～1年④

第二段階 提出は任意（提出は評価、繰り返しは更に評価）～2年③

第三段階 提出義務なし（提出も繰り返しも特に評価しない）2年④～

右は、提出義務をなくした結果のグラフである、3分の2の生徒が繰り返しを行った。「半分くらい」「ほとんどやっていない」の23名のうち、約半分の11名がそれまでの自身の平均点より下がり、12名が平均点より上がった。この12名に関しては、自身の選択として「目的意識をもって効率のよくないワークをあえてやらなかった」と考えられるので問題はないが「ワークをやらずに点数が下がった11名」への支援は今後の課題である。

全体的な結果を見ると、「目的意識をもって自身で学習方法を選択する」ということができるようになった生徒は増えたと考えられる。



【仮説②】

基礎的・汎用的能力を高めれば、それらを様々な具体に応用して、学力等の認知能力の向上にもつながるだろう。

ア 県標準学力テストの結果から

1年時の県標準学力テストと2年時の県標準学力テストの偏差値を比べてみた。これを見ると、わずかではあるが、数値の向上が見られる。今後、更に数値を追っていきたい。

	国語	社会	数学	理科	英語	平均
1年時	50.4	48.8	49.7	48.5	50.0	49.48
2年時	52.0	50.9	50.2	49.2	49.5	50.36
伸び	△1.6	△2.1	△0.5	△0.7	▲0.5	△0.88

イ 社会科定期テストの期待値から

社会科の定期テストでは、各問題の難易度を5段階に設定し作成した。定期テストの度に、170名強×50問強（レベルは5段階）の正誤を蓄積し、そのデータをもとに毎回、テストの「期待点」を割り出していた。

1学年定期テスト①～④、2学年定期テスト①～④、3学年定期テスト①の全9回のデータが以下である。

	1①	1②	1③	1④	2①	2②	2③	2④	3①
期待点	/	61.3	60.1	60.2	61.2	61.2	59.2	61.5	62.5
平均点	69.3	64.1	59.8	58.4	62.1	70.1	61.1	67.6	67.3
期待点 ±	/	△2.8	▲0.3	▲1.8	△0.9	△8.9	△1.9	△6.1	△4.8

データを見ると、2年生になってからは、毎回「期待点」を上回ることが続いている。期待点を上回るということは、自分達の過去のデータを上回っていること、つまりその都度、成長していることとみられる。

6. 成果と課題

<成果>

- 多くの成長マインドセットを与えることで、生徒の基礎的・汎用的能力が育ち、様々な場面で生徒が成長できるという我々の実感は強い。
- 生徒に与えた成長マインドセットをベースとして、小さな単位の指導ではなく、学年等の大きな単位で、継続して指導することによって効果が大きくなるという我々の実感は強い。

<課題>

- ▲非認知能力を数値として計測するのは難しく、本当に成果が上がったのかエビデンスを示すことは難しい。
- ▲数値としても伸びている部分はある（大きくはない）が、それが因果関係なのか相関関係なのか、はっきりとエビデンスを示すことは難しい。
- ▲「学年として」ではなく「学校として」全ての生徒に指導ができるよう、カリキュラムマネジメントの視点も含めて学校全体での指導計画を作成していく必要がある。